

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

篠原ともえ デザイナー / アーティスト

Tomoe Shinohara / Designer / Artist



CREATOR INTERVIEW No 156

篠原ともえ Tomoe Shinohara

1995年歌手デビュー。文化女子大学（現・文化学園）短期大学部服装学科デザイン専攻卒。メディアでの活動を経て、現在はデザイナーとして創作活動が続け、これまでに松任谷由実コンサートツアー、嵐ドームコンサートなど、アーティストのステージ・ジャケット・番組衣装を手がけている。2020年アートディレクターの池澤樹とともにクリエイティブスタジオ「STUDEO」を設立。2022年デザイン・ディレクションを手掛けた革の着物作品がニューヨークADC賞（銀・銅）、東京ADC賞を受賞。

Official Website

<https://www.tomoeshinohara.net>

Instagram

@tomoe_shinohara

挑む気持ちやそのプロセス、
作品が完成した喜びが、
その人の未来をつくるアクションになっていく。

クリエイターインタビュー
「ずっと愛することが持続可能なものにつながっていく」

published_2024.05.08 / photo_yoshikuni nakagawa / text_akiko miyaura

デザイナー、アーティストとして、着実に、けれど大胆に、進化をし続ける篠原ともえさん。「第101回ニューヨークADC賞」では、ブランドコミュニケーション部門でシルバーキューブ、ファッションデザイン部門でブロンズキューブを受賞し、世界でも実力を示しました。その審美眼と洞察力で、2023年に続き、「TOKYO MIDTOWN AWARD 2024」デザインコンペの審査員も務めることになりました。ご自身の経験に裏打ちされたコンペティションの意義や魅力、審査員としての思い、そして篠原さん自身のデザイナーとしての視点や姿勢など、さまざまな角度からお話いただきました。

六本木は好奇心をちゃんと育ててくれる街。

私が歌手としてデビューしたのは1995年。当時の六本木は「大人の街」「夜の賑わい」といった印象で、10代の私がカジュアルに行く場所というイメージはあまりありませんでした。けれど、私自身がアートやデザインに興味を持ち、つくる側になっていった時期と並行するように、美術館の建設など都市開発が進み、いつしか身近に感じる場所になっていきました。それは、クリエイティブに関心のある大人が集まれる場所を街がつくってくれたという感覚でした。

今は、何か新しいものに出会える六本木の街の力を信じて、導かれるように足を運んでいます。休日に「何かやっているかな」と調べると、面白い美術展が行われていたり、気になる映画が上映されている。また、何かファッションのアイテムがほしいときに六本木ヒルズのショッパを覗くと、そこには新しいファッションやカルチャーが生まれているんです。常に新しいものを探し求めている私にとって、六本木は好奇心をちゃんと育ててくれる場所。アイデアのきっかけやインスピレーションをもらえる何かがある街なんです。

日々見つめる自然が作品のインスピレーション。

六本木は都会的な冷たさではなく、自然と融合しているとも感じます。私も参加したことがあります。六本木ヒルズで開催される「六本木天文クラブ」の「星空観望会」は自然を感じられるイベントです。また、「東京シティビュー」から見える景色は圧巻で、展覧会を見に行っただけなのに、つい夕暮れの写真を撮ってしまったり（笑）。雲の動きを眺めたり、雨が降った日に虹が出るのを待ったりと、とてもワクワクさせてくれる場所です。

一方、東京ミッドタウンには雄大な芝生があり、子どもたちがはしゃいでいる楽しい声も聞こえて、五感を楽しませてくれます。以前、寒い冬の日と夫と買い物をした帰りにミッドタウンガーデンを歩いていたら、絵に描いたようなかわいらしいミノムシが木にぶら下がっているのを見つけました。ビル群がそびえ立つ都心に小さな命が宿っていることに、とても感動したのを覚えています。



六本木天文クラブ/ 星空観望会

「六本木天文クラブ」とは、六本木ヒルズ展望台 東京シティビューが実施しているさまざまな天文に関するイベントの総称。毎月第4金曜日は「六本木天文クラブの日」として「星空観望会」などを六本木ヒルズ内で実施。「中秋の名月」や「流星群」などに合わせた特別観望会やワークショップなど、年間を通して楽しい星空イベントを開催している。

<https://tcv.roppongihills.com/jp/tenmon/>

私のインスピレーション源は意図せず自然そのものになることが多いので、街中にいるときも常に自然に反応してしまいます。夕暮れのグラデーションや、ふと緑が風に揺れる瞬間、美しい太陽の光といった風景を日々見つめていると、あるとき作品となって私の中から湧き上がってくる。自然の中に組み込まれた無作為な美しさは、まさにありのままの芸術です。つい自然の中にあるグラデーションを目で追いかけてしまうのも、きっと自然へのあこがれの表れなのでしょうね。



篠原ともえ デザイナー / アーティスト

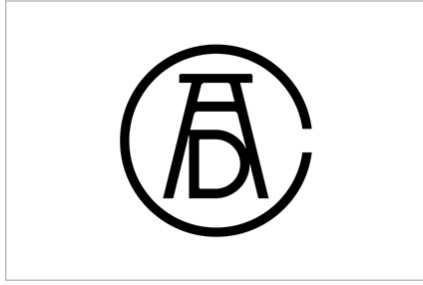
TOMOE SHINOHARA / Designer / Artist

published_2024.05.08 / photo_yoshikuni nakagawa / text_akiko miyaura

コンペには、プリミティブなつくることへの楽しみがある。

グラデーションといえば、「第101回ニューヨークADC賞」のブランドコミュニケーション部門でシルバーキューブ、ファッションデザイン部門でブロンズキューブをいただいた革の着物の作品《THE LEATHER SCRAP KIMONO》も水墨画のようなモノクロのグラデーションを生かしたものでした。これまで見た美しい幽玄の世界が自分の中に残っていたのですね。本来捨てられてしまうエゾ鹿の革の端切れの曲線美を見たとき、山の稜線と重なったんです。

自然のうつろいや季節を美しく感じるのは、日本人の審美眼だと思いますし、そういったものを感じ取って作品にしたいという思いが私の中に常にあります。自分が美しいと信じたものをつくっていると、心を震わせてくれる人に必ず出会える。「ニューヨークADC賞」での評価は、その信じる力に対する答えをいただけたようで、とてもうれしかったです。同時に、デザインの力が職人さんたちの素晴らしい技術や育まれてきた文化をつなぎ、新たな魅力を引き出す糸口になることに、実感を得られた経験でもありました。



ニューヨークADC賞

1921年に広告美術団体「Art Directors Club (ADC)」によって設立された、世界で最も歴史のある広告デザインの国際賞。2017年からは「The One Club」と「Art Directors Club」の合併によって設立された「The One Club for Creativity」が主催している。毎回、世界中から多くのエントリーがあり、各国の広告、デザイン、アートなどの関係者から注目を集める。



THE LEATHER SCRAP KIMONO

篠原さんが「動物たちの命からいただく貴重な革を、余すところなく使いきる」との思いを込め、エゾ鹿の革の端切れを使って、草加の革職人や染め職人などの技術によって具現化。革の端を山の稜線に見立て、水墨画の風景を表現した着物。篠原さん自ら何度も工場に足を運び、たくさんの時間をかけて作り上げた。2022年には「第101回ニューヨークADC賞」で、ブランドコミュニケーション部門でシルバーキューブ、ファッションデザイン部門でブロンズキューブの2冠を受賞。

Photo: Sayuki Inoue ©TANNERS' COUNCIL OF JAPAN

思い返すと、私が初めてコンペティションにエントリーしたのは、12、13歳の頃。中学の放送委員会とチームをつくり、企業が主催した学校紹介のビデオコンクールに参加しました。私は脚本や編集を担当したのですが、その作品が優秀賞をいただいたことが思い出として残っています。洋裁の本が主催するコンペに自分で考えた洋服のデザインをイラストにして送ったら、実際に服にしてもらったことも。どれも小さな賞ではあったけれど、人に見てもらえる機会を得た喜びはとても大きいものでした。また、デザイン学科に通っていた高校時代には、先生の勧めで応募したポスターのコンクールで賞をいただいたこともあります。その経験は当時の多感だった創作の感性に大きな勇気をくれました。

応募する側の私の根底にあるのはシンプルに「作品を見てほしい」、「見た方に喜んでほしい」という思いです。プリミティブなつくることへの楽しみが、そこにはあります。ですから、いい意味で考えすぎず、「挑戦してみよう!」とエントリーして「できた! 見て見て」と子どものような気持ちで作品を届けられるのだと思います。

視点や未来を大事にしている「TOKYO MIDTOWN AWARD」。

デザイン会社を立ち上げた今もコンペにトライする立場ではありますが、同時に審査する側を務めさせていただくこともあります。2023年に続き、「TOKYO MIDTOWN AWARD 2024」でも、デザインコンペの審査員をお受けすることになりました。私自身、コンペに挑む皆さんの気持ちはよくわかります。自分の作品は本当に見てもらえているのかな、作品に込めた思いや意味は届いているのかなと感じることもあるかと思いますが、「TOKYO MIDTOWN AWARD」は、審査員全員が本当に真剣に作品を審査していることを知ってもらえたらうれしいです。



TOKYO MIDTOWN AWARD 2024

東京ミッドタウンが「"JAPAN VALUE (新しい日本の価値・感性・才能)"を創造・結集し、世界に発信し続ける街」をコンセプトに、才能あるデザイナーやアーティストとの出会い、応援、コラボレーションを目指して、2008年からデザインとアートの2部門で開催するコンペティション。篠原さんが審査員を務める「TOKYO MIDTOWN AWARD 2024 デザインコンペ」の応募締め切りは6月27日(木)。審査員は篠原さんの他、倉本仁さん、菅野薫さん、中村拓志さん、山田遊さんの4名が務める。

昨年、TOKYO MIDTOWN AWARD の審査に参加して感じたのは、作品やデザイナーの未来を見ている審査員の方が多いことでした。このアワードでは「未熟ではあるけど、育てる価値のある視点を持っている」「作品としてはゴールには届いていないが、未来へ向けての可能性に溢れた作品だ」等、視点や未来を大事にされています。例えば昨年のデザインコンペでは、黒澤杏さんの《動く募金箱》がグランプリを受賞しました。1次審査では、作品案のみを見るため、学生だと知らずに選んだのですが、結果的に最終審査を経て、若い世代が受賞されたことは、審査員としてもとてもうれしかったですね。また、いろんな人が楽しめる《リバースけん玉》や、家族の味を思い出してつなぐ《記すビーカー》といった、自分の体験やルーツを形にした作品、愛をつなげることをデザインした作品など、温かさを感じるものが選ばれた印象があります。



動く募金箱

「つながり」をテーマに開催された「TOKYO MIDTOWN AWARD 2023」で、デザインコンペのグランプリに選ばれたのが、学生の黒澤杏さんが制作した、人と人をつないでいる「バトン」と、人と人をつなぐ活動をしている「募金」を掛け合わせた「動く募金箱」。篠原さんも「アイテムを"バトン"にすることで、手渡しするという思いそのものも感覚的に体感できたプロダクト」と講評した。



リバースけん玉

「TOKYO MIDTOWN AWARD 2023」で、デザインコンペの優秀賞4点のうちの1作品。プロダクトデザイナーの都淳朗さんとUIデザイナーの太田壮さんが制作。従来の「玉と皿」「剣と穴」それぞれの役割を入れ替え、「役割の逆転」によって既存の遊びを誇張しながら新しい楽しみ方とコミュニケーションが生まれる作品。篠原さんは「新しいのに、懐かしいデザイン。検証結果の成果も発揮され、完成度の高さが光る逸品」と講評した。



記すビーカー

学生の大原衣吹さんが「オリジナルの目盛をメモできるビーカー」として制作。「TOKYO MIDTOWN AWARD 2023」では優秀賞を受賞。六角柱型のビーカー側面にはフロスト加工が施されていて、マジックペンで書き込むことができる。篠原さんは「味だけではなく、家族に記してもらった文字そのものも含め宝物になるような作品。文字を記す側にも幸せな時間をくれそうです」と講評した。

審査の流れとしては、1次の書類選考を通過した10組が2次審査に進み、2次では模型を用いたプレゼンを行っていただきます。プレゼン終わりで審査員との質疑応答の時間があるのですが、そこでは質問というより、アドバイスをたくさん投げかけているような状況になることもあるんです。審査員は現役で活躍する、アイデアを育むプロフェッショナルなので、的確にすぐ活用できる言葉を投げかけることも多く、それらのフィードバックは、未来ある応募者の方々にとって、とても価値のある経験になると思います。その一連のプロセスは私自身もとても勉強になっています。

審査員の皆さんが審査を進めるうちに作品への思い入れが強くなっていく様子も、このアワードの素敵的一面です。選考の際、もちろん意見が分かれることもありますが、「これはいい!」と感じた作品を審査員の誰かが一生懸命に推すという光景が生まれる。皆さん、過去の自分を見ているような気持ちになるのか(笑)、応援したいという空気に満ちています。



TOKYO MIDTOWN AWARD 2023

2023年度の審査員は篠原さんの他に、菅野薫さん、中村拓志さん、三澤遥さん、山田遊さんといったファッション、デザイン、建築、広告など各分野から集結。総計1,166点の作品を「デザイン力」「提案力」「テーマの理解力」「受け手の意識」「実現化につながる」という5つの審査基準のもとに審査が行われた。審査過程で議論をつくしたものの「僅差で優劣をつけられない」となり、優秀賞を規定の3点から4点へと1点増やす結果に。ジャンルが異なる審査員が集まったことで、菅野さんは「審査のプロセスが非常にクリエイティブなものでした」と振り返っている。

理由を考え探ることが、学びになっていく。

コンペの受賞数は限られているので、惜しくも受賞を逃した方は、審査員に作品が評価されなかったと感じることがあるかもしれません。でも、そこには届かなかった理由が必ずあるはず。選ばれなかったと気持ちを落とすのではなく、届かなかった理由を探ることが学びとなり、楽しさになっていくのではと思います。逆に「なぜ、この作品は受賞したのか」を考えていくと、自分の作品に足りないものを発見する機会になるのではないのでしょうか。

審査員を務める立場からお伝えしたいのは、自信のある作品や誰かの瞳に映ることで行動源になると言える作品があるならば、ぜひ堂々とエントリーしていただきたいです。テーマに対して自分がゼロからモノをつくるって、それだけワクワクするじゃないですか。もちろん、受賞という目的に向かって走るけれど、挑む気持ちやそのプロセス、作品が完成した喜びが、その人の未来をつくるアクションになっていく。「私はこう思う!」と独自のアプローチを見つけたときの喜びも大きいと思います。今の私自身もこれまで多くの挑戦や挫折を遂げて今があります。アイテムを通じて問題解決をし、人とは違う表現を考えることが、オリジナリティを育てることもつながっていく。1人じゃなく、チームで作品を作ってみるのも素晴らしい思い出になると思います。あまり気負いしすぎず、自分を楽しませる気持ちで、ぜひ参加してみてください。六本木という地で発進されるこのアワードから次世代のデザイナーが生み出されること、そして新しい才能が育つことを願いながら、しっかりと見届けさせていただきます。

撮影場所：東京ミッドタウン ミッドタウン・イースト 1F アート作品《passeneger》* 前

* 神谷 徹《passeneger》2007、ミクストメディア、90 x 90 cm (12 点組) 東京ミッドタウン コミッションワーク



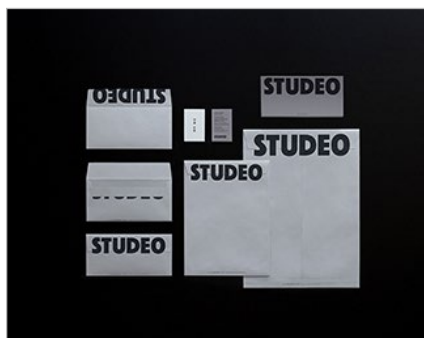
篠原ともえ デザイナー / アーティスト

TOMOE SHINOHARA / Designer / Artist

published_2024.05.08 / photo_yoshikuni nakagawa / text_akiko miyaura

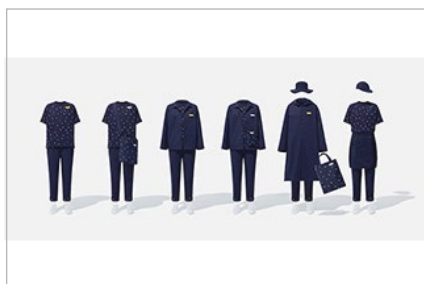
向き合う課題があるから乗り越える楽しみがある。

私は2020年に、夫でアートディレクターの池澤樹とクリエイティブスタジオ「STUDEO」(ストゥディオ)を立ち上げました。設立当時、徐々に世の中に浮かび上がってきていたのが「多様性」や「持続可能」といったワード。当初はその課題に向き合えるか不安もありましたが、アイテムを通じ世の中に新しいアイデアの発信や、クライアントの問題解決をすることはデザイナーの責務でもあります。私自身、現代のさまざまな議題を当初からポジティブにとらえ、受け入れながらモノをつくっていきたくて思っていましたし、今となっては多様性も持続可能であることも自分のモノづくりの中に根付いています。例えば「OMO7 大阪 by 星野リゾート」のユニフォームはコンペでの参加だったのですが、世代や性別を問わないジェンダーレスで機能的なスタイルを徹底的に追求し、ホテルのコンセプトと掛け合わせご提案したアイテムです。向き合う課題がある時代、新しいことに取り組む過渡期にいられるのは、乗り越える楽しみがある。どんなものを社会に届けていけるのか、自分自身にも期待しながらつくっていきたくてです。



STUDEO

篠原さんとアートディレクターの池澤樹さんが、2020年に設立したデザイン会社。「STUDEO」はSTUDIOやSTUDYを語源した言葉であり、「専念する」「勉強する」「努力する」などを意味するラテン語。ブランド戦略のコンセプト構築から広告をはじめとしたコミュニケーションの設計、ビジュアル開発、商品デザイン、ウェブ・空間デザインまでを一気通貫した仕事を強みとし、その他クリエイティブ分野であるファッション・テキスタイルデザイン、アートマネジメント、アート・デザインキュレーションなども手がける。



OMO7大阪(おも) by 星野リゾートのユニフォーム

大阪のホテル「OMO7大阪 by 星野リゾート」のユニフォームを篠原さんがデザイン。ネイビーを基調にドット柄とピンドットを掛け合わせ、ジャケット、シャツ、パンツで構成され、すべて日本生産であることもこだわっている。世代や性別を選ばないのはもちろん、帽子やバッグといった小物でスタッフが個性を表現することもできる。

Photo: Takakazu Aoyama

愛せるモノは、ずっと未来に残っていく。

今思うと私が10代の頃の創作していた衣装は、どちらかというとジェンダーレスなスタイルが好みでした。純粹に自分に似合うと思って着ていたものが、たまたま男性も女性も真似しやすいスタイルだった。アクセサリなどを自分で制作していたので、ゼロから創作したファッションがメディアを通じて広がりカルチャーへと発展していった。当時は、真似してくださる喜び以上に、つくる喜びを届けられたことが何よりうれしかったのを覚えています。

何かに対して「好き」「楽しい!」と夢中になれる、その気持ちはみんなに届くと信じています。ファッションなら自分で好きなものを着て、絵であれば部屋にお気に入りのものを飾って、プロダクトなら自分が価値を感じるものを手に入れる。そうやって見つけた愛せるものたちは、ずっと未来に残る大切なものになっていく。一見、サステナブルの文脈とは別ものを感じるかもしれませんが、ずっと愛することが持続可能なものにつながっていくのではないかと思います。

街に根付く美しいものが見えると、つくるべきモノがわかる。

人にモノを届ける立場になって、新たな視点や意識の変化が生まれたのは、夫との出会いがとても大きいです。アートディレクターとしてデザインに対する総合的な知見があり、私にとっての恩師です。設立したデザイン会社では就職するような気持ちで、たくさんの方を見聞きし、一つひとつの学びを大切にしてきました。クライアントワークでは自分だけの感覚や思い付きではなく、デザインを届ける相手のことをまずは調べ、学ぶことがマナーだという彼の姿勢は、今の私のモノづくりに大きな影響を与えています。

昨年、参加した「八王子芸術祭」のアートプロジェクト「CLEAN HIKES, GREEN PEAKS MT. TAKAO」で制作したメッセージバッグも、まず街を調べるプロセスから始まりました。八王子はデザインを学ぶための学生時代を過ごした街ですので、自分ではよく知っているつもりだったんです。でも、実際にリサーチを始めると、知らないことの方が多く、いかに自分の知識が不十分だったかを目の当たりにしました。街のことをよくご存知の方にお電話をしてお話を聞いたり、八王子の歴史の本を読んだり、とにかく調べに調べました。

特に助けになったのが、街の方の声が記録された「オーラルヒストリー」。それは新しい施設等をつくるときに、周辺に住む地域の方や関係者から聞いた話や証言を、市が街の声として資料化していたもの。そこには市民の方の街への悩みやリクエストも記されており「八王子は高尾山が有名だけど、アイコン的なアイテムがない」という声が綴られていました。また別の資料では、林業に従事されている方の間伐材に関する深刻な状況や課題も知ったのです。さまざまな問題を自分なりに書き出していくと、つくるべきものが段々と浮かび上がってきました。そうして私が導いたデザインアイテムが、間伐材を資材にし創りあげたメッセージバッグでした。



CLEAN HIKES, GREEN PEAKS MT. TAKAO

2023年の「八王子芸術祭」で、篠原さんが手掛けたアートプロジェクト。地域の方々に守られてきた高尾山の自然の美しさと、それを守る活動や意識に敬意を込め、「クリーンな山歩きが、緑美しい山々を育む」という思いで、持ち運べるアートとしてメッセージバッグをデザイン。高尾の間伐材を活用して、和紙製作の技法を掛け合わせ、一つひとつ手づくりで制作された。期間限定で無料配布を実施した。

Photo : Machiko Horiuchi



篠原ともえ デザイナー / アーティスト

TOMOE SHINOHARA / Designer / Artist

published_2024.05.08 / photo_yoshikuni nakagawa / text_akiko miyaura

ポテンシャルがある街だからこそ、可能性は無限大。

そう考えると、きっと六本木も紐解いていったらまだまだ知らない歴史が出てきそうです。八王子の声を聞き導いた私の作品のように、六本木に住まわれている人や足を運ぶ方々の声、この「六本木未来会議」のアーカイブから何か新しいものが見えてくる可能性もあるかもしれません。ポテンシャルがある街だからこそ、できることはジャンルレスで無限大ですよ。

今、六本木未来会議をはじめ、皆さんが実践されているさまざまなプロジェクトも、いち参加者として期待しています。例えば「六本木アートナイト」は、私も楽しみにしているアートフェスティバルです。特に印象に残っているのは、「Compagnie des Quidams (カンパニー・デ・キダム)」による白いバルーン作品です。かつて2010年に足を運びましたが、夜の六本木に巨大なバルーンがゆらめき合う圧巻のパフォーマンスは今でも鮮明に目に焼きついています。フランスのラ・マシンというアート集団が、機械仕掛けの巨大な人形を作り、それを使ったパフォーマンスをしているのですが、「六本木アートナイト」ではそれと近い雰囲気を感じて、とてもワクワクしました。

また、最初にお話したように、六本木にはたくさんの自然があります。春の美しい桜やたくさんの緑、冬にはアイススケートもできる。面白いアートや新しいカルチャーだけでなく、豊かな四季も感じられる場所だと、より多くの人に知ってもらうこと、気づきを与えることで、さらに街が魅力的になっていくのではないかなと思います。



Compagnie des Quidams (カンパニー・デ・キ ダム)

主宰者ジャンバティスタ率いるフランスのスペクタクル・パフォーマンス・グループ。巨大な光るバルーンを多用した造形が特徴的で、その幻想的な美しさと気品のある演技は国際的に高い評価を得ている。「六本木アートナイト」には、これまでに2度登場し、2010年に「ハーバードの夢」、2016年には「FierS a Cheval〜誇り高き馬〜」を披露した。

<https://www.roppongiartnight.com/spinoff/contents/295/>

©六本木アートナイト実行委員会

撮影場所：東京ミッドタウン ミッドタウン・タワー1F アート作品《2・1・2・3 柵型四群一瞥と擦れ違い》前

取材を終えて

篠原さんは、聡明であると同時にチャームングで品がある。デザインや表現はもちろんのこと、そのピュアな人間性と真摯な姿が多くのオファーを引き寄せているのだと感じる取材でした。手のひらで何でも調べられる時代に、自らの身体を動かし調べ上げる篠原さんのリサーチはとてつもない行為。対象へのリスペクトと深い洞察が、純度の高い作品をつくるのだとあらためて感じました。そして、「TOKYO MIDTOWN AWARD 2024」が目指す、新たな才能の発掘への温かな思いに感動しました。(text_akiko miyaura)